

中国の文体改革

—— 胡適 “八不主義” とその展開 ——

鈴木 義 昭

キーワード

八不主義・文学革命・イマジストクリード

近代的な文体改革の流れを見る時、日本・中国ともに外圧的な動きの中で形成されて来た点に類似した面がある。日本の「言文一致運動」は、明治維新、外来文化の流入と同時に起こったのではない。中国の文体改革運動の《文学革命》も、清末の洋務運動・辛亥革命以来の洋化運動と直接に連動して始まったものでもない。「言文一致運動」が明治二十年代に、《文学革命》が1910年代の後半と、ある一定の慣熟期間を経て醸成して来た点でもまた同様である。中国が日本より多少短期間であった点も他の分野と類似する。

1980年代後半から、胡適の静かなブーム——まだ正式な名誉回復が行われたというわけでもない——が続いており、管見・架蔵だけでも十数種に上っている。恐らく、これに倍する書籍が出版されていることであろう。そこに中国の対台湾問題・対西洋諸国政策の影を見るのは、発表者だけではないであろう。また、現代中国語・中国文学においても、必ずしも超克できていない諸問題——例えば文言と白話の問題等——の解決の糸口を見い出そうとしているようにも見える。本発表においては、胡適という人物の幅広い思想を語るのでもなく、《文学革命》そのものに立ち入るのでもなく、《文学革命》のスローガンとして広く知られた胡適の“八不主義”の形成の過程——時間にとると、1916年8月から1918年4月の間と、その

前後——を主として眺めておきたい。なお、この過程は胡適というアメリカ留学の青年の、25歳から28歳までの成長の過程ということを経験しておきたい。

*

*

胡適「八不主義」の原形は1916年8月19日の朱経農への書簡、「寄朱経農」(『嘗試集』序による。『胡適留學日記』は8月18日に作る。今、前者による。以下、(1)と呼ぶ)、1916年8月21日の陳独秀への書簡、「寄陳獨秀」(『新青年』第2期2号 10月1日発行 以下、(2)と呼ぶ)の中で提出され、1916年11月に書かれた「文學改良芻議」(『新青年』第2期5号 1917年1月1日発行 以下、(3)と呼ぶ)で一部が手直しされ、さらには、1918年3～4月に書かれた「建設的文學革命論」(『新青年』第4期4号 1918年4月15日発行 以下、(4)と呼ぶ)において、再度の改定が行われる。その要目を図示すると、次ページの図のようになる。

「寄朱経農」および「寄陳獨秀」、「文學改良芻議」はいずれもアメリカで書かれているが、最後の「建設的文學革命論」だけは、中国で書かれる。ちなみに、胡適がアメリカに留学していたのは、1910年8月16日、帰国したのは、1917年7月10日のことである。こうした(1)～(4)の順を追って検討していくことによって、胡適の思考回路、すなわち胡適流の文体改革の道筋が辿れるのではなかろうか。

この表を見れば分かるとおり、各項目は必ずしも同じ順位に置かれていない。ただ、(1)の「寄朱経農」と(2)の「寄陳獨秀」とは、提出された時間が比較的近いので、ほぼ同じ順序に並べられている。表現は少しく異なっているが、1番目～5番目までを「形式」の面、6～8を「精神」の面としていることも同様である。(1)にあつて(2)にない要素はほとんどないと言っていいが、逆に(1)になくて、(2)において付け加えられたものとして、(2)－3の「文當廢駢，詩當廢律」の部分、(2)－5の「……之結構」の部分、(2)－7の「語語須有個我在」の部分とが挙げられる。

- | | |
|---|---|
| <p>(1) 「寄朱經農」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 不用典. 2. 不用陳套語. 3. 不講對仗. 4. 不避俗字俗語 (不嫌以白話作詩詞.) 5. 須講求文法. 一以上爲形式的方面. 6. 不作無病之呻吟. 7. 不摹倣古人. 8. 須言之有物. 一以上爲精神 (內容) 的方面. <p>(3) 「文學改良芻議」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 須言之有物. 2. 不摹倣古人. 3. 須講求文法. 4. 不作無病之呻吟. 5. 務去爛調套語. 6. 不用典. 7. 不講對仗. 8. 不避俗字俗語. | <p>(2) 「寄陳獨秀」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 不用典. 2. 不用陳套語. 3. 不講對仗 (文當廢駢, 詩當廢律) 4. 不避俗字俗語 (不嫌以白話作詩詞) 5. 須講求文法之結構.
此皆形式上之革命也. 6. 不作無病之呻吟. 7. 不摹倣古人, 語語須有個我在. 8. 須言之有物.
此皆精神上之革命也. <p>(4) 「建設的文學革命論」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 不做『言之無物』的文字. 2. 不做『無病呻吟』的文字. 3. 不用典. 4. 不用套語爛調. 5. 不重對偶: 一文須廢駢, 詩須廢律. 6. 不做不合文法的文字. 7. 不模倣古人. 8. 不避俗話俗字. |
|---|---|

【図—1】

また、(2) と (3) とを比べてみると、例えば、(1) の「寄朱經農」・(2) の「寄陳獨秀」の冒頭にある「不用典」は、(3) の「文學改良芻議」では6番目となり ((4) の「建設的文學革命論」では三番目となっている)、(3) 以降で冒頭に来ることはない (その他については、後ろの【図—2】参照)。

(3) と (4) とは、書かれた時間は1年余と比較的離れているにもかかわらず、(2) と (3) ほどの変化はない。これを図示すると、以下のようになる (例: (1) の1 [不用典] が他の論で何番目になるかを表す)。

この図を見ると、先に指摘したように、(2) と (3) との間に大きな断裂があることが看取される。また、一番上に置かれたからといって、それを胡適が最も重視したとも言えないであろうが、少なくとも (1) と (2)、(3) と (4) とでそれぞれ同じ位置を保持しているものには、胡

(1)	(2)	(3)	(4)	
1 [不用典]	⇒ 1	⇒ 6	⇒ 3	適のある種の思い入れがあっ
2 [不用陳]	⇒ 2	⇒ 5	⇒ 4	のではないかと考えられる。
3 [不講對]	⇒ 3	⇒ 7	⇒ 5	それは(1)において四番目
4 [不避俗]	⇒ 4	⇒ 8	⇒ 8	に提出された「不避俗字俗
5 [須講求]	⇒ 5	⇒ 3	⇒ 6	語」と8番目に提出された
6 [不作無]	⇒ 6	⇒ 4	⇒ 2	「須言之有」である。文頭に
7 [不摹倣]	⇒ 7	⇒ 2	⇒ 7	「不」を付けて、スローガン
8 [須言之]	⇒ 8	⇒ 1	⇒ 1	としてより整った形になるの

【図-2】

は、1918年の「建設的文學革命論」

「八不主義」の名称もこの時期以降に付けられたものであることがよく了解されるであろう（それまでは、単に「八事」と呼ぶことが多い）。ただ、(1)、(2)に挙げられた「形式上之革命」と「精神上之革命」という二分法式はそれなりに整合性を持っており、分かりやすいものと言うことができよう。しかし、「文學改良芻議」及び「建設的文學革命論」では、この方式は何故か放棄されている。これについては、さらに触れることにしたい。

*

*

さて、胡適が文体改革に志すきっかけになったのは、1915年のある時、鍾文鰲なる人物が「教育を普及するためには、字母を持たなくてはだめだ」と言ったことに触発され、「漢字廢止論に激怒した」ことに始まる、と言う（「逼上梁山」）。では、八か条のクリードはどのようにして形成されていったか。以下、順次それを眺めてみることにしたい。胡適はアメリカ留学生の間にできた「文學科学研究部」で、「如何可使我國文言易于教授」（原文は英文、1915年8月2日書、26日発表）という論文を書く。その要旨は以下の四点である（『胡適留學日記』卷十一による）。

- (一) 無論吾國語能否變爲字母之語，當此字母制未成之先，今之文言，終不可廢置，以其爲僅有之各省交通媒介物也，以其爲僅有之教育授受之具也。

- (二) 漢文問題之中心在于“漢文究可爲傳授教育之利器否”。
- (三) 漢文所以不易普及者，其故不在漢文，而在教之之術之不完。
- (四) 舊法之弊，蓋有四端：
 - 1. 漢文乃是半死之文字，不當以教活文字之法教之。
 - 2. 漢文乃是視官的文字，非聽官的文字。
 - 3. 吾國文本有文法。……文法乃教文字語言之捷徑：
 - 4. 吾國向不用文字符號，致文字不易普及：

ここでは、(一)の項では、字母を用いることができるかどうか、(二)、(三)の項で古典中国語が教育の現場に載せることができるか、普及できないとしたら、教育法に問題があるとして、(四)の1～4でより具体的にその欠点を挙げ、提言を行う。1, 2では、白話体の採用を示唆し、3, 4では、より具体的には文法と标点符号の普及を提案しているわけである。1915年8月には、「論句讀及文字符號」(8月2日、出稿先「科学」。そのひな型は1914年7月29日「標点符號釋例」にある)を書く。9月には、その補遺の意味を持つ「論文字符號雜記三則」(同18日、「留學日記」)、10月には同じく、「文字符號雜記二則」(10月15日、「留學日記」)等を書く。また、「死之文字」=文言と「活文字」=白話という図式も重要である。

以上のことから、文法に関しては、図一1の(1)の5に先立つものであることが了解される。一方、文字・符号については、文言の中に具体的には書かれていないが、(1)―4の中に発展していくと考えてよいであろう。いずれにしても、文法と表記という形式面が出発点になっていた点は、プラグマティストの胡適の論として、誠にふさわしいものと言ってもよいではないか。

胡適の「文學革命」の語は、

……文學今革命，作歌送胡生。

という、任叔永の詩(1915年9月19日作)に対して、胡適が

詩國革命何自始，要須作詩如作文。琢鏤粉飾喪元氣，貌似未必詩之純。
小人行文頗大膽，諸公一一皆人英。願共僂力莫相笑，我輩不作腐儒生。

と和したところにあるとされる（同9月21日作）。

また、1916年2月3日の日記には、

與觀莊書前所論『詩界革命何自始，要須作詩如作文』之意。略謂今日文學大病，在於徒有形式而無精神，徒有文而無質，徒有鏗鏘之韻貌似之辭而已。今欲救此文勝之弊，宜從三事入手：第一，須言之有物；第二，須講文法；第三，當用『文之文字』（觀莊書來用此語，謂 Prose diction 也）。時不可避之。三者皆以質救文勝之敝也。

とあって、黄遵憲たちの「詩界革命」では、文章を書くように詩を書くようにするということが大きな眼目であったわけである。「今日、文学の大病は、徒に形式ばかりあって、精神がないこと、つまり、“文”はあるが、“質”がないことである」という現状認識を示し、そうした弊害を除去するためには、「須言之有物」、「須講文法」、「當用“文之文字”」の三点が必要であると記す。ただ、ここでは、韻文と散文の区別を行おうという意志があまりないように見受けられるが、それは彼が「實地試験」を行っていたのが詩歌であったからであろう（それに、この当時胡適には「文之文字＝散文」と「詩之文字＝韻文」とを厳密に分ける意図がなかったようである——「『文之文字』與『詩之文字』」）。これを（1）に当てはめれば、順に8，5，4ということになる。「形式的方面」が2点、「精神 [内容] 方面」が1点ということになる。ここに至って、精神面が導入されるわけである。

同じく2月10日の日記には、

……要之，無論詩文，皆當有質。有文無質，則成吾國近世委靡腐朽之文學，吾人正當廓而清之。然使以文學革命自命者，乃言之無文，欲其行遠，得乎？近來頗思吾國文學不振，其最大原因乃在文人無學。救之之法，當從績學入手，徒於文字形式上討論，無當也。

とあって、文学一般に論を展開する。すなわち、「近來，文学が不振の原因は，文学者の無学にあるのであって，徒に文章の形式ばかりを討論するのではなくて，学問を積み」と言うわけである。これも（1）—8「須言

之有物」の中に入れることができよう。なお、同年4月5日には、「吾國歴史的文學革命」『留學日記』同日の項と題する論文を書いている。

文學革命，在吾國史上非創建也。卽以韻文而論：三百篇變而爲騷，一大革命也。又變爲五言，七言，古詩，二大革命也。賦之變爲無韻之駢文，三大革命也。古詩之變爲律詩，四大革命也。詩之變爲詞，五大革命也。詞之變爲曲，爲劇本，六大革命也。何獨於吾所持文學革命論而疑之？(以下略)……

胡適の文学革命肯定論である。各時代各時代にそれぞれ時代を代表する文学があるというのは、王国維などにも見られる観点であるが、それを各時代に革命を経て出来上がったとするのは、胡適一流の論であろう。だからこそ、彼は臆することなく「革命」の語を使っているのである。しかし、革命の対象として持ち出されているのは全て韻文であることに注意しておきたい。

また、1916年4月17日に書かれた文章、「吾國文學三大病」『留學日記』同日の項では、当時の中国文学の欠点、三か条を挙げる。

吾國文學大病有三：一曰無病而呻。哀聲乃亡國之徵，況無所爲而哀耶？二曰摹倣古人。文求似左史，詩求似李杜，詞求似蘇辛。不知古人作古，吾輩正須求新。卽論畢肖古人，亦何異行屍贗鼎？『諸生不師今而師古』，此李斯所以焚書坑儒也。三曰言之無物。諛墓之文，贈送之詩，固無論矣。卽其說理之文，上韓退之原道，下至曾滌生原才，上下千年，求一墨翟莊周乃絕不可得。詩人則自唐以來，求如老杜石壕吏諸作，及白香山新樂府秦中吟諸編，亦寥寥如鳳毛麟角。晚近惟黃公度可稱健者。餘人如陳三立鄭孝胥，皆言之無物者也。文勝之敝，至於此極，文學之衰，此其總因矣。

「三大病」とは、「無病而呻」、「摹倣古人」、「言之無物」((1)では、「言之有物」と書かれる)のことである。これは、それぞれ(1)―6, 7, 8に該当する。(1)を發表した当時の胡適の言い方に従えば、「精神(内容的方面)」のものということになる。胡適は後に、以上の五点が先に案

出され、残る三点はその後、付加されたものであると言う（『逼上梁山』——文學革命的開始——）。

同じく「逼上梁山」によれば、1916年7月8日イサカで、任鴻雋、陳衡哲女士、梅光迪、楊杏佛、唐鉞たちと遊んだ時、任の作った詩の中に陳腐な言葉が現代語と一緒に使われていることを指摘して、論争になったと言う。胡適が「陳腐的文字＝古典語」と「現代語言」とを区別しようとしていたことがよく分かる。

実を言うと、前々日の7月6日の日記（追記）に拠れば、すでに同所で友人三人と文学改良の方法を論じている。上記の件は、その頃に集中的に討論されていたわけである。それによれば、

- (一) 今日之文言乃是一種半死的文字，因不能使人聽得懂之故。
- (二) 今日之白話是一種活的語言。
- (三) 白話並不鄙俗，俗儒乃謂之俗耳。
- (四) 白話不但不鄙俗，而且甚優美適用凡言語要以達意爲主，其不能達意者，則爲不美（略）。
- (五) 凡文言之所長，白話皆有之。而白話之所長，則文言未必能及之。
- (六) 白話並非文言之退化，乃是文言之進化。其進化之跡，（略）。
- (七) 白話可產生第一流文學（略）。
- (八) 白話的文學爲中國千年來僅有之文學。（略）其非白話的文學，如古文，如八股，如劄記小說，皆不足與於第一流文學之列。
- (九) 文言的文字可讀而聽不懂；白話的文字既可讀，又聽得懂。凡演說，講學，筆記，文言決不能應用。今日所需，乃是一種可讀，可聽，可歌，可講，可記的言語。要讀書不須口譯，演說不須筆譯；要施諸講壇舞臺而皆可，誦之村嫗婦孺而皆懂。不如此者，非活的言語也，決不能成爲吾國之國語也，決不能產生第一流的文學也。

文学改良の道具は「白話を用いて文を作り，詩を作り，戯曲を作ることである」（同日の日記）というわけである。これらはいずれも（1）—4「不避俗字俗語（不嫌以白話作詩詞）」及び—7の「不摹倣古人」の範囲

に入るであろう。

胡適は1916年7月17日の日記に、梅光迪の手紙を書き写している。その中に、次のような一節がある。

……(前略)夫文學革新，須洗去舊日腔套，務去陳言，固矣。然此盡屏古人所用之字，而另以俗語白話代之之謂也。

と。また、8月23日の日記に「觀莊之文學革命四大綱」と題して、同年8月8日付けの梅迪光からの手紙を書き写している。それには、

一曰擯去通用陳言腐語。如今南社人作詩，開口『燕子』『流鶯』『曲檻』『春風』等，已毫無意義，徒成一種文學上之俗套（Literary Convention）而已。

二曰復用古字以增加字數。……（略）

三曰添入新名詞。如『科學』『法政』新名字，爲舊文學所無者。

四曰選擇白話中之有來源有意義有美術之價值者之一部分以加入文學。然須慎之又慎耳。

とある。先の手紙の「舊日腔套」と「務去陳言」、後ろの手紙の第一条、「擯去通用陳言腐語」が（1）—2とよく似ていると言えよう。その後ろに胡適の評語がついていて、

觀莊以第二條爲最要，實則四事之中，此最爲似是而非，不可不辨。他日有暇當詳論之。

とあるが、胡適個人が案出したものでないとするならば、梅光迪たちとの討論によって得られたものである可能性が高い。

「不用典」については、この時期までの日記などにも相応の記載がない。恐らくは、八項目の主張の中では、一番最後に形成されたものであったと思われる。朱経農に八か条の主張（これが（1）である）を記した8月19日のすぐ後、8月21日に、陳独秀に手紙を書いている（「寄陳独秀」）。これは「新青年」に掲載された謝无量という人物の詩の中に見られる典拠の多さは、主幹である陳独秀の日頃の主張と矛盾していると述べ、さらに、「寄陳独秀」（「新青年」に発表した時、「10月白」と記す）では、次のよ

うに書く。これが(2)である。

適嘗謂凡人用典或用陳套語者，大抵皆因自己無才力，不能自鑄新辭，故用古典套語，轉一灣子，含糊過去，其避難趨易，最可鄙薄！在古大家集中，其最可傳之作，皆其最不用典者也。

と言って、杜甫、韓愈、白居易たちが典拠を用いず、詩作をしたことを例として挙げる。一代の詩人と言われる人々は、むやみに典拠を用いなかったと言うわけである。その後ろの部分には、

總之，以用典見長之詩，決無可傳之價值。雖工亦不值錢，況其不工，但求押韻者乎？……

總觀文學墮落之因，蓋可以『文勝質』一語包之。文勝質者，有形式而無精神，貌似而神虧之謂也。欲救此文勝質之弊，當注意言中之意，文中之質，軀殼內之精神。

とあって、「文＝形式」と「質＝精神」についてへの言及があるわけで、1916年2月3日の日記にあるとおり、胡適がこうした二元論的な分け方に関心を持っていたことが窺われる。ただ、これには友人たちからの反論が多く、(3)においては克明な解説をつけざるを得なかった。

では次に、(2)と(3)とに何故ある種の断絶が起こったか、考えてみたい。これは、先ず第一には、先にも述べたように、胡適自身による意識的な改編であった。「逼上梁山」によれば、

……那年10月中，我寫信給陳獨秀先生，就提出這八個“文學革命”的條件，次序也是這樣的：不到一個月，我寫了一篇《文學改良芻議》，用複寫紙抄了兩份，一份給《留美學生季刊》發表，一份寄給獨秀《新青年》上發表。在這篇文字里，八件事的次序大改變了：(省略)

這個新次第是有意改動的。我把“不避俗字俗語”一件放在最後，標題只是很委婉的說“不避俗字俗語”其實是很鄭重的提出我的白話文學的主張。(略)

とある。その原因として、先ず、陳独秀による反論を挙げることができるであろう。陳独秀は『新青年』(第二卷第二号)で、

承示文學革命八事，除 5，8 二項，其餘六事，僕無不合十贊嘆。……
として，(1) — 5 「須講求文法」，8 「須言之有物」の条が理解できない
と言う。(3) 「文學改良芻議」では，それらは 1，3 に置かれることになる。
重要度の低い順に置いたのは，陳独秀の意を酌んだからとも考えられ
る。5 は「形式的方面」にあり，8 は「精神（内容）的方面」にあるわけ
で，こうした二分法を採用することが無理になったため，これを取ったの
ではなかろうか。そして，(3) ではそれぞれに実に詳しい論拠を提出し
ているわけである。それと関連して，(1)，(2) の中でさかんに出て来
た「革命」の語が「改良」，「變遷」，「進化」に変わる。「文學改良芻議」
と言う時の「芻議」は，

……草成此論，以爲海內外留心此問題者作一草案。謂之芻議，猶云未
定草也。伏惟國人同志有以匡糾是正之。

のであると言う。胡適は「實地試驗」の語をよく用いるが，「文學改良芻
議」も試験的な試みであったというわけである。「逼上梁山」では，

在 1916 年的 11 月，我開始把我們一整年非正式討論的結果，總結成
一篇文章在中國發表，題目叫做《文學改良芻議》。

在那篇文章里我提出八條很溫和的建議。* 可看出，縱是這個題目
也是很謙虛的。我已經不再用我朋友們所時常提到的“文學革命”了。

“文學革命”一詞在我的詩和信里都時常提到；在朋友們給我的信中也
時常提起。有時他們用的是開玩笑的態度；但是有時也很嚴肅。可是當
我第一次要把我們一年多討論的結果，和我自己的結論，撰寫成文章，
送到國內發表時候，爲考慮到那無可懷疑的老一輩保守分子的反對，我
覺得我要把這一文題寫得溫而謙虛。所以我用這個題目，說明是改良而
非革命；同時那只是個“芻議”，而非教條式的結論。

と言う。そのために，「革命」の語を取り去ったというわけである。こう
した態度は (4) の「建設的文學革命論」で，「革命」という語を復活さ
せることを容易にする。すなわち，陳独秀は「文學革命論」（「新青年」第
二卷第六号 1917 年 2 月 1 日），「答胡適之」（1916 年 10 月 1 日）を書き，

錢玄同は「寄陳獨秀」(1917年2月25日),「新文學與今韻問題」(1917年11月21日),「寄胡適之」(1917年7月2日),劉半農「我之文學改良觀」(1917年5月1日),「應用文之教授」——商榷於教育界諸君及文學革命諸同志(1918年1月15日)等が書かれ,多くの同志を得て,「革命」の語に対して臆する必要はなくなり,通行している名称としては,「改良」よりも「革命」の方が通りがよいということに安堵をしたものと思われる。

次に,(3)と(4)との順序変更について述べておく。この文は,一介のアメリカ留学生が書いたものではなく,新進の文学革命論者,評論家,北京大学教授胡適が書いたものであるということに注意しておかなくてはならない。「建設的文學革命論」には,「國語的文學,文學的國語」という副題が付いているとおり,文学という一種の個人的営みから,文芸復興という文明論的な面,文字政策の分野に踏み込んでいると言ってもよいであろう。ここでは,八か条をまとめて,

一,要有說話,方才說話。這是“不做言之無物的文字”一條的變相。

二,有什麼話,說什麼說;話怎麼說,就怎麼說。這是(二)(三)(四)(五)(六)諸條的變相。

三,要說我自己的話,別說別人的話。這是“不摹倣古人”一條的變相。

四,是什麼時代的人,說什麼時代的話。這是“不避俗話俗語”的變相。と言う。(3)の3~7までの順序を並べ替えて,(4)の2~6に置き換え,2を7に戻したということになる。これは(1),(2)の形に戻ったことでもある。また,上のように纏められるならば,八か条に及ぶリードは必ずしも必要なかったとも言える。そのヒントの一つとして,「進化」,「嘗試」・「實地試驗」等の言葉を挙げることができるであろう。例えば,

詞乃詩之進化。(「留學日記」1915年6月6日) / 今人稍明進化之跡,

……(1916年8月2日) / 「中國古代哲學方法之進化史」(博士論文の題名 1917年5月4日提出)

……其實此種詩不過是文學史上一種實地試驗,……(「同」1915年9

月17日) / 儻此革命潮流 (革命潮流即天演進化之迹. ……，即謂之『進化』可也。) (「同」4月5日) 此兩詞皆『文學』的實地試驗也。(「同」1916年4月8日) / ……今亦決然作此實地試驗，可喜也。(「同」1916年7月6日) / 此等詩亦文學史上一種實地試驗，……。(「同」同上) / ……何不自己『實地試驗』以爲將來之『詩人』『美術家』『文學家』作先鞭乎？(「同」1916年7月14日) / (自跋) 這首詩可算得一種有成效的實地試驗。(「同」1916年8月23日) / 意欲俟『實地試驗』之結果，……(「同」1916年9月15日)
……私心頗欲以數年之力，實地練習之。(「同」1916年8月4日)
……『試』嘗試之意。(「同」1916年8月31日) / 嘗試歌……之與吾主張之實地試驗正相反背，……。(「同」1916年9月3日)

等とあり，多くの命題を挙げられるだけ挙げて，それを一つ一つ解決していくことこそプラグマティズムにとってより相応しいものであったし，とにかくいろいろな試みを行い，それを発表してみるという態度が伺えるであろう。こうした態度と胡適のコロンビア大学における博士論文の主査であるプラグマティズム哲学者，ジョン・デューイとの関連については，稿を改めて発表したい。

最後に，よく言われる「イマジストクリード」との関係を指摘しておきたい。何故ならば，(1)「寄朱經農」は主に韻文を対象にして書かれているからである。8月21日の日記によれば，

……(前略)我主張白話作詩，友朋中很多反對的。其實人各有志，不必強同。我亦不必因有人反對遂不主張白話。他人亦不必都用白話作詩。

白話作詩不過是我所主張『新文學』的一部分前日寫信與朱經農說：

とある。7月30日の日記によれば，觀莊は胡適への手紙で，「新潮流」(New Movement)を痛罵するとともに，その潮流の名前を挙げる。

文學：Futurism, Imagism, Free Verse.

美術：Symbolism, Cubism, Impressionism.

宗教：Bahaism, Christian Science, Shakerism, Free Thought, Church of

Social Revolution, Billy Sunday.

と。イマジズムもこの中にあり、間接的な批判となっている。それに対して、胡適は次のように反論する。

……足下痛詆『新潮流』尙可恕。至於謂『今之美國之通行小説，雜誌，戲曲，乃其最著者』則未免厚誣『新潮流』矣。……足下豈不知此諸『新潮流』皆未嘗有『通行』之光寵乎？豈不知其皆爲最不『通行』（Unpopular）之物乎？其所以不通行者，正爲天下不少如足下之人，以『新潮流』爲『人間最不祥之物』而痛絶之故耳。……老夫不怕不祥，單怕一種大不祥。大不祥者何？以新潮流爲人間最不祥之物，乃真人間之大不祥已。……

「ニュームーブメント」を不祥とすることこそ大いなる不祥であると言って、それを斥けているわけである。そうした胡適がイマジストクリードに何らかのヒントを得たとしても不思議ではない。胡適は1916年12月26日の日記に「印象派詩人的六條原理」と題して、ニューヨークタイムズのブックシェッカーからイマジズムクリードを引用する。その後、

意派所主張，與我所主張多相似之處。

と書いている。イマジストクリードに似ているという、人々からの指摘や批判があったことを予想させる。文章から言えば、イマジストクリードが自分の主張に似ているとも取れるし、自分の主張がイマジストクリードに似ているとも取れる。念のため、胡適の（1）の「寄朱經農」とオールデントンが書いたとされる「イマジスト・クリード」とをもう少し詳しく対照してみなければならないであろうが、他の場所でも語った事があるので、ここでは私見としての結論だけを述べるに止めておきたい。すなわち、胡適のアメリカ留学の時期は、ニュームーブメントと時間的にはほぼ一致する。彼はそうした流れの中で、今まで見てきたように、友人と語り合い、論争しながら自己の理論を積み重ねてきたのであるし、世界的な文学の潮流の中で、中国独自の文学の在り方を模索してきたのである、と。沈衛威の言う、「胡適と“イマジスト”との関係は、“影響”ではなく、“平

行”（二者が歩みを同じくして進む）関係である」との見方に大方の賛意を表しておく（『传统与现代之间』——寻找胡适 河南大学出版社 1994）。

*

*

本稿は1996年10月4日、北海学園大学で開かれた日本文体論学会第70回大会で発表した草稿に加筆したものである。また、平成七、八年度早稲田大学特定課題研究「聞一多の総合的研究」の一環でもある。